

月田秀子の昨日、今日、明日…

「ヒデコ、リスボンから君の姿が見えなくなって、3年になるね。リスボンで、歌う君の姿が見たいよ。声が聴きたいよ。昔のように、また、リスボンで歌ってくれよ」カルロス・ゼルの声で目を覚ました。

きうびい嬢が、3年ぶりにバルセロナへ行くということを聞いてから、私の心はにわかにポルトガルに行きたい想いでざわめき始めていた。そんな矢先の朝のことだった。3年前、悲しみに押しつぶされそうになる私を支えてくれたのがバルセロナ経由でリスボンに飛んできたきうびい嬢だった。

「塩鱈のような涙」を流しながら、バルセロナに戻った彼女を見て、スペインの友人が言ったそうだ。「あんな暗い国に行くからよ」。

カルロス・ゼルの突然の死の悲しみで一杯になった心を携え、逃げるように、リスボンを後にしてから、3年になる。「彼の墓参りに行く」。それだけを胸に、「マヌエル」のライブを終えた2日後、私は急遽日本を飛び立った。墓参りを済ませたら、ポルトガルの田舎町を旅してみようと思っていた。彼のいないリスボン、ファド酒場へ足を向ける勇氣はその時はまだかけられなかった。



—リシュボア再訪記—第一夜—

夕方5時過ぎにリシュボア空港に着いた。いつもの夜に着く便は、満席でとれなかった。あのオレンジ色の明かりの散りばめられたリシュボアを眼下に見る感激は味わえなかった。3年の空白の後に、恋人に会うような、不安と期待の入り混じった緊張感が、着陸のショックで一挙に溢れ出した。

25年来の友人フェルナンダが、預けてあったギターを片手に迎えに来てくれた。「私は、あれから20キロも太ったというのに、秀子は変わらないね。顔もそのままだし、リフトでもしているの？」フェルナンダの少し鼻にかかったおもねるような話し方は相変わらずだ。そう、人はそんなに簡単に変わるものではないのだ。カルロス・ゼルの墓参り、音信が途絶えているジョアンのお知らせをつかむこと、昨年亡くなったカルロス・パレデシュの墓参り、今回の訪ポの目的を告げると、すかさず、フェルナンダが「アマリアの墓参りもでしょ」と付け足した。そう、今回は、「墓参りツアー」なのだ。「Eterna Saudade (永遠のサウダーデ)」墓石に刻まれたそんな言葉が、再会の弾んだ心を引き締めた。

14日にカルロス・ゼルの墓参りに一緒に行くことを約して、その日は別れた。

前日までの3日間のライブの疲れもあつたりして、荷物をほどき、ベッドに横になったのだが、眠れそうにもない。ちょっと一杯ひっかけると外に出た。予想外の冷気に、さらに目はパッチリとしてきた。

道すがらファドの歌声に吸い込まれるように一軒の店に入り、きついバガツソを注文した。バガツソというと、かならずといっていいほど余り美味しくないポルトガルのブランディーがでてくるので、「色のついていない若いのを」と付け足すことも忘れなかった。さらに小声で、「安い奴」とつぶやいた。にこりと笑いながら女主人がだしてくれたその透明な液体を、一気に飲み干し、お代わりを頼んだ。かなり、心がほどけてきた。よく見ると、ギタリストも

3日遅れでポルトガルギターの上川保も、リスボンにやってきた。そうすると彼のポルトガルギター修行のため、ひと肌もふた肌も脱がねばなるまい。ポルトガルギターのレッスン、現地のギタリストとの練習、ギターの工房を訪ねること等、にわかに具体的なスケジュールが決まっていた。なにせ滞在は1週間しかないのだ。

かなりハードで充実したスケジュールをこなし、日本へ帰国した翌日から、関西4日間ライブが続いた。帰国前夜まで、アルファマで歌っていたことが、まるで夢のように思われた。というより、日本で歌っていることがまるで夢のように思えたといった方がいりかもしれない。時差ぼけと、気管炎、更年期障害が輪をかけてのように、わたしから現実感を奪っていた。

リスボンに着いた時、ポルトガルを離れていた3年間の空白が嘘のように思え、日本に帰国した時、10日間のポルトガルでの出来事が、まるで夢のように思え、そうになると、今までファド一筋に生きてきた私の人生が、単なる夢のようにも思え、今終わろうとする私の人生=現実もまた、もしかしたら夢なのかもしれない……、合わせ鏡の世界に迷い込んだような毎日が続いている。

歌い手もかなりの年寄りだった。イギリス人の観光客4人がろうそくの灯った薄暗く狭いテーブルで食事をしながら、ものめずらしそうにファドを聴いていた。

通りすぎる観光客をキャッチしようと、店先で、その女主人が愛想を振りまく姿が目につき、その店を出た。

初老の男性が二人近づいてきて、私のファドが聴きたいという。見覚えのある顔だったので、「まあ、いいか」と一緒に別の店に行くことになった。1曲歌うとかなりの拍手が来て、結局3曲歌った。かなりの疲労感に、しきりに引き止める彼らに別れを告げ、宿へと向かった。

途中、「Clube do Fado」をのぞくと、なんと今夜は、レロがギターを弾いているという。彼は、1988年リスボンで初めてテレビ出演した時、バックを務めてくれたギタリストで、1993年のアマリアの日本での最後の公演の時に初来日している。アマリア亡き後、タクシーの運転手をしながら、好きな歌い手のギターを弾いていたが、彼のギター伴奏を望む歌手が多いらしく、また、ギタリストとして活躍しているという。それもそのはず、タクシーの運転手をしながら、ギターを本格的に習い始めたという。暖かくて気のいい17年来の私の大切な友人だ。私と同じ年で、すでに、孫が一人いる。演奏を終えて出てきた彼は、目をまん丸にして満面の笑顔で、両手を広げ、再会の抱擁だ。

待合のバーの片隅でタバコを吸っているフォンテス・ロシヤの姿もあった。

かつてアマリアのポルトガルギターを弾いていた往年のギタリストだ。アマリア・ロドリゲスの詩によるファド「洗濯」「私の中のファド」「失った心」等の曲は彼によるものだ。88年アマリア・マトス劇場で「暗いはしけ」を歌ったときは、彼の伴奏だった。リハーサルなしのぶっつけ本番で、ステージに立って初めてそのことを知った。夢のような瞬間だった。その日はアマリア・ロドリゲスも会場にきていて、歌い終わったとき、「アマリアは、どこ?」「彼女は、もう帰ったよ」という客席からの声を寂しく聴いたことを思い出す。後日、上川保を伴って、店を訪れた時、なんと彼に素敵なフレーズを自ら弾いて教えてくれた。保は大感激。1926年生まれ、

もう80に手が届くというのに、相変わらず現役で弾いている。その透明な存在感に私は感動を覚えた。彼のように淡々と生きられるようになるまで、まだまだ長い修羅の道がありそうだ。覚悟せよ、秀子はん。

10日後に東京四谷の「マヌエル」出演予定の、ポルトガルギターのマリオ・パシエコ、歌手のアルシンド・カルヴァーリョ、若き歌姫ジョアナ・アメントエイラ達との再会に、いつのまにか疲れも吹き飛び、満席の店の後の壁にもたれかかりながら、ステージを一回聴いて、帰路に着く。日付はとっくに変わっていた。

カルロス・ゼルの墓参り

白いバラとマーガレットの花束を片手に、ベレンへと向かう私の耳に、「今日は、恋人達の日」そんな声が飛び込んでくる。Dia para Namorados (恋人達の日) パレンタインデーのことをポルトガルではそう呼ぶ。2月14日、3年前のこの日に、カルロス・ゼルは突然私たちの前から姿を消した。

ジェロニモス修道院の近くにある、ベレンのバステラリア・デ・ベレンで、待ち合わせた私たち、フェルナンダ、アントニオと私3人は、アントニオの運転するピカピカのベンツで、カシュカイスの近くのカルロス・ゼルの眠る墓地へと向かった。いや、その前に、丁度お昼時だったので、海辺のレストランで食事をすることにした。奇しくも、3年前、アントニオと昼食をとっている時に、カルロス・ゼルの悲報を聞いたレストランだった。フェルナンダの明るさと三年の歳月が、あの時、色をなくした空に、すっかりあのリスボンの青い空を取り戻してくれていた。かもめが翼を広げ、海辺のテラスに陣取った私たちの前を掠めていった。

選挙を控えているせいか、二人はしきりに深刻な顔で国政を論じているようだった。「ヒデコ、久しぶりを見るリスボンはどう？」突然真顔で、フェルナンダが尋ねた。「そうね、よくわからないけど、町を歩いて思ったのは、とてもファッションブルな店が増えたこと、それも若者向けの店がね。その反面、年配の人たちの元気がないような気がする」。「良くなった？それとも悪くなった？」すくなくとも後者の答えを期待するような暗い語調で尋ねる彼女に、「わからない」としか、答えられなかった。そういわれれば、一見、人々の身なりは良くなってはいるが、昔のように、おっとりした人が少なくなり、みなせわしげに歩いているのは事実だ。携帯電話の普及率も日本並だ。車も一昔のころのポンコツは影を潜め、新車が目立つ。その影に潜んでいる問題がきっとあるに違いない。が、訪れて3日しか経たない外国人にはわかるはずがない。

その後、私がポルトガルを去る20日に総選挙があり、中道左派の野党、社会党が大勝し、3年ぶりに政権を獲得することになった結果からすると、かなりの問題が鬱積していることが推測できる。それにしても、野党がしっかりしている国はいい。そして、しっかり支持表明のできる政党を持っている彼らが単純にも、うらやましいと思った。

「ところで、アントニオ、最近よく行くファドの店は？」私は話題を変えた。

アントニオは大のファド好きで、手帳は、ぎっしりファド歌手、ギタリストの名前と電話番号で埋まっている。「最近、余り行かなくなったな。カルロス・ゼルもいないし……」力なくアントニオは答えた。「パキートもなくなったし」パキートは、アマリアのバックも勤めていたギタリストで、大柄でかなり派手なギターを弾いては、喝采を浴びていた姿を思い出す。ファドの店で、伴奏してもらったこともあるし、日本へきたとき、スペイン料理店に連れて行ったときの食べっぷりのよさにはびっくりした思い出もある。彼は、スペイン出身だった。「パキートのお墓参りもしなくちゃね」今回は、思い切り墓参りツアーだ！

ワインと食後のアマルギーニャ（アモンドのリキュール）で、かなりいい気分になったところで、カルロス・ゼルの墓参りに行った。お葬式のとき、参列者で溢れ返っていた墓地は、人気もなく、彼のお墓には、黄色いバラの花束が供えられていた。「2分間だけ、黙祷しよう」アントニオはそういって、十字を切り、目を閉じた。

私たち3人が出会ったのも、カルロス・ゼルの歌っていた店だった。いつもの調子で彼は私を聴衆に紹介し、その時、私の歌を聴いていたアントニオが、翌日、感動のお礼にと、自分のワインの醸造所に、フェルナンダと私を招待してくれたのだ。

ほとんどいつもと違っていいほど、カルロス・ゼルは、私のいく

店に現れ、ステージに引き出してくれた。「ピアノ・バー」という番組で、初めて彼に会った時のこと、そして、最後に、体の不調を訴える彼に会った時のこと、様々なシーンが甞った。彼とは同じ年だ。彼は、若手のファディスタ達に、道を作り続けた。今、活躍している若手の歌手達はほとんど、彼の出演していた、カジノ・エシュトリルのゲストとして呼ばれたと言っているほどだ。そして、私も、若くはないが、そのうちの一人、それも彼が呼んだ最後のゲストになってしまった。それが、彼の最後の私への大きなプレゼントだった。……2分じゃ足りない。幸い、私は、彼に黙祷する機会を持っている。歌う前のほんの短いそんな時を。

天に召されたジョアン

空は晴れ渡っているのに、風は冷たく、木々もない広い原っぱのような墓地に吹きすさんでいた。門前に花を売る人がいるだけで、事務所と思しき建物は鍵が閉まっている。困り果てていた時、気のよさそうなおじさんが、私たち（保も同行してくれたのだ。）に手招きをして、裏手の建物に連れて行ってくれた。カウンターの向こうには、年別にまとめられた過去帳とおぼしきファイルが並んでいる。「仏さんがなくなったのは、いつだい？」彼は、私に尋ねた。

（クリスチャンだった人をそう呼ぶのはおかしいが、そのおじさんの口調は、そんな感じだったのだ）

ジョアンと連絡がつかなくなり、すがる想いで、ジョアンと初めて会った時一緒だったエリザベトという、女友達の携帯に電話してみた。2002年7月に彼は亡くなったという。悲しい予感も当たっていた。「ヒデコに知らせたくても、知らせようがなくて……」といいながら、彼の眠る墓地をゆっくりとした口調で、彼女は教えてくれた。子供のような純粋さを保ちつづけていたジョアンのただ一人の友達だったエリザベトもまた、純真でやさしい心の持ち主だった。

1999年7月、一通のポルトガルからの手紙を私は受け取った。「ポルトガル語でお手紙を送る非礼をお許しください。1988年、はじめてあなたのファドを聴きました。多分RTPのカルロス・クルスの番組での事だったと記憶しています。そして、わたくしにとってそれは素敵な驚きでした。様々な理由から深く感動し、誇りに思いました」手紙はそんな文章で始まっていた。（詳細は、1999年10月発行の会報24号、ホームページ [FADO CLUBE] のコーナーで紹介させていただいている）はるか遠くポルトガルからの、それも私の歌を初めて聴いてから10年余りの歳月を経て、私の手元にたどり着いたジョアンからの熱烈なファンレターだった。

翌年の2月、テージョ河の川べりのバステラリアに私たちはいた。アマリアのファド「マリア・リシボア」を小さな声で口ずさむと、ジョアンとエリザベトが顔を乗り出し、一緒に歌いだした。ジョアンはその不自由な指でテーブルをたたきリズムをとった。まるで、ずっと昔からの幼友達のように私たちは、お互いの目を見つめあい、うなずきあいながら、次から次へとアマリアのファドをできる限り声を抑えて歌った。ジョアンは目を潤ませて子供のようにしゃいだ。それ以降も、若い頃発病した脊髄カリエスに蝕まれたジョアンの容態は悪くなる一方だった。この変形した指で、手紙を書き、版画を彫り、送ってくれていたのだ。彼の実家を一度訪れたことがあるが、馬車が何台もある立派なお屋敷だった。彼は、そこから離れて一人でその不自由な身体で、孤独と病と闘いつづけていたのだ。そんな彼にとっての楽しみのひとつに私の歌、私との邂逅が加わった。そして、3年後、病は彼の生きる意思をも奪い去ってしまった。「今度来たときは、日本食を作ってあげる」最後の約束は果たせぬままだった。彼のリスボンの街の版画は、リビングの壁にある。私を見つめるあのいたずらっぽい目は、時々落ち込んだ私の心を慰めてくれさえする。

墓守のおじさんに案内されたジョアンの墓は、40センチ四方ほどの小さなプレートに名前と生年月日、死亡月日が記されただけの質素なものだった。そこには、「ETERNA SAUDADE」の文字さえもなかった。2月にしては冷たすぎる風が吹きすさんでいた。いつも凍えるように冷たかったジョアンの手を思い出した。

阪神大震災から10年

投稿者：ととろ（西宮）

2005年1月17日で阪神大震災から10年が経った。
震災は自然災害なのに人工的災害でもあるのだ。
例えば世に有名な安政年間に巨大地震が起こっている。
安政 元年 11月4日……M8.4
同 年 11月5日……M8.4
同 年 11月7日……M7.9
安政 2年 6月9日……M6.9

阪神大震災（M7.2）最近では 中越地震（10月23日M6.8、その後M5以上が10回）起こっている。

でも安政年間で起こった地震は阪神より規模も大きく4日のうち3回阪神大震災より、大きいのが起こっている。その場にいたら、中越地震と同様に（新潟の中越地震は台風23号の影響があり地盤も緩んでいた）この世の終わりと感じたに違いない。

安政大地震が一番被害が大きかったのは、いくつめだと思う？

答えは4つ目のマグニチュードの小さい地震です。

先の3つは持ちこたえたものの、4つ目で、火災が発生した。江戸の町は城を守るため入り組んだ町並みになっていた。半年間で4000人ほどが亡くなっている。

地震が直接原因ではなく江戸の文化が多くの死者をだしたのだ。

安政の地震後80年経って、大正12年に関東大震災が起こっている。このときは10万人の犠牲者が出ている。このときの安政と大正の違いは東京のヨーロッパ化された文明の形だ。

もっと西洋化されていた現代ではもっと恐ろしいかも。

もしも阪神大震災が午前5時46分ではなく、午後8時に起きたとしたらどうなっているだろう。その被害者は10万人単位だと思う。倒れた高速道路は車で溢れ、落ちた新幹線の橋桁には時速200キロメートルで満員の新幹線が通りかかる。阪神電鉄も阪急電鉄も神戸地下鉄もラッシュアワーだし、倒壊したビルには多くの人がいただろう。国道2号線、43号線は渋滞し車に次々と火が回って火炎の帯になったに違いない。そこから派生する災害を考えるととんでもなく恐ろしい……

こう考えると地震が人を殺すのではなく文明が人を殺すのだと。

阪神大震災で価値観が変わったという人が多くいる。大切に集めていた食器や家具がこわれてしまい、どうやって生きていこうかと啜然としてしまったと聞く。

私の家も全壊した。1ヵ月後ぐらいに地震後初めて、月田さんのライブに行ってみた。（そのときまで聞いたことがあったかもしれないが）そのとき聞いた「どんな声で」を歌っている彼女をみつめながら、なんとなく涙が出てきた。

まだ避難生活中の私には、出だしがすごく切なく感じられた。あとで尋ねてみると、彼女がFADOを歌い出したとき、師と仰ぐアマリア・ロドリゲスの声との余りもの隔たりに、どんな声で歌ったらよいか悩んだと聞いている。

私も、倒壊した我が家から、いろいろと取り出したいものがあったが、

よくいわれるものにアルバムがあるが、たまたま取り出せたものもあったが、所詮は「思い出」一心の中に生きるとおもえば惜しくなくなった（歌は残る）。

月田さんあの性格だからなるようにしかならないと考えたかもしれないと思っていたのだが、それ以来、その歌にはまってしまい、ライブでこの歌を聴けない時は、なんとも物足らなく感じてしまう。（遅く行くと、既に歌ったあとだったり、その時の口惜しささらない）

話は文明と地震だったかな。ヨーロッパ文明が地震の被害をほとんど被っていないのはご存知だろう。

ギリシャやローマの古代円柱や、水道橋等が立派に残っている（行ったことはないが）。

ポルトガルでは、1755年11月1日にリスボン港の先を震源とする地震が起こっている。リヒタースケールの最大値であるマグニチュード9を記録した巨大地震である。

その日はたまたまキリスト教徒の「諸聖人の日」という祭日にあっていたので、街中の善男善女はすべて礼拝のため丘の上の教会に詰めかけていた。その教会がまず倒壊。瓦礫の下に埋まって死んだ人は数千人といわれる。

次に港と下町に津波が襲った。高さは9mとも15mともいわれている。

これで丘の上を除いてリスボンは全滅した。同時に発生した火事は6日間も燃え続けてさらに被害は広がった。死者は6万人にのぼったといわれている。

当時のヨーロッパの大都市の人口は、せいぜい10万人前後だから事実上リスボンという都市そのものが壊滅したことになる。

こう考えると150万人人口の神戸市で5000人の人が亡くなったというのは次元違う（怒られるかもしれないが、私も身内が亡くなっているから話として読んでください）

ポルトガルという国は、スペインと全世界の海洋を2分して支配することをパチカンから認められた大覇権国家だった時代がある。最盛期にはアフリカの金・インドの香辛料・南米の染料が流れ込みリスボンは世界一の商業都市だった。

18世紀にはまだまだ世界的商業都市の面目は保っていた。そこへ大地震。その後スペインや英国にくらべ大きく見劣りする。

ポルトガルがたった一度の地震で失ったものは、ただの人的物的被害ではなかった。あの大地震はポルトガルという大覇権国家の栄光を一瞬のうちに葬り去った。おそらく永遠に。

ファドという歌の哀しみは、ただの郷愁ではない。あまりにも突然そして永遠に失ってしまった、ひとつの覇権国家の青春への慟哭なのだろう。その国家の青春時代を構成していた光に満ちた時代、人間たち。誇りや、喜びや、希望や、愛や……。それら二度と帰ることのない幸福な日々への、哀愁に満ちた鎮魂歌なのだろうか。

ファドきれいな歌だと思う…… 哀しみはきれいだよ

P.S また大きな地震が起きた。スマトラ沖大地震。津波による犠牲者は30万を越えるといわれている。犠牲になった人たち、そして残された人たちの悲しみが、10年前の僕にタイムスリップさせる。僕は、月田さんの「どんな声で」を聴くために、今月もライブに足を運ぶだろう。

fados canções

PRIMAVERA

Poema: David Mourão Ferreira
Musica: Pedro Rodrigues

Todo o amor que nos prendera
Como se fôra de cera
Se quebrava e desfazia
Ai funesta primavera
Quem me dera, quem nos dera
Ter morrido nesse dia

E condenaram-me a tanto
Viver comigo meu pranto
Viver, viver e sem tí
Vivendo sem no encanto
Eu me esquecer desse encanto
Que nesse dia perdi

Pão duro da solidão
É somente o que nos dão
O que nos dão a comer
Que importa que o coração
Diga que sim ou que não
Se continua a viver

Todo o amor que nos prendera
Se quebrara e desfizera
Em pavor se convertia
Ninguém fale em primavera
Quem me dera, quem nos dera
Ter morrido nesse dia

春

訳詞：カウド・ヴェルデ

私たちが結びつけていた愛のすべては
まるで蠟燭のように
崩れて溶けていった
ああ 忌まわしい春よ
出来ることなら
その日に命果てていたかった

それでも私は深い哀しみを抱えて
生きていかなければならない
生きて生きて でもあなたははいない
その日失った あの魅惑を
忘れ得ぬまま
生きていく

孤独という名の硬いパン
私たちに食べるよう
あてがわれるのはそれだけ
心が頷くか拒むかは
大事なことでない
もし生き続けるのなら

私たちが結びつけていた愛のすべては
崩れて溶けて
恐怖に変わっていった
誰もが春には口をつぐむだろう
出来ることなら
その日に命果てていたかった

informação

- ポルトガルで、『O FUTURO DE SAUDADE (サウダーデの未来)』(副題「新しいファドそして新しいファド歌手達」)という本が出版されました。その中の<国境の向こうのファド>の章に月田が紹介されています。著者のManuel Halpern氏にリスボンでお会いしました。31歳のジャーナリスト。そんな若者がファドに目を向けている、今のポルトガルのいや世界のファドの状況を象徴しているようです。
- 6枚目のCD「ギターに寄せて」少しずつ注文が入ってきています。やはり、ファドのCDを作る必要性を感じつつあります。月田のファドの集大成になるCDを作りたいと思っています。何とか年内に……。
- 東京・目白の三華でのファドライブへのお誘い
1988年の秋、心に響く歌声を聞きました。あれから僕のそばにはいつもその歌声がありました。当時、サラリーマンだった僕が、今度その歌手のライブを開催しようと思いました。僕が感じたように、もっと多くの人々にも感動を共有してほしいからです。「月田ワールド」は、実はファドだけではないと思っています。いろいろな場所で、とてもひろいジャンルの唄に感情を込めて語りかける月田秀子を僕は知っています。今

回、目白のお店「^{みはな}三華」のオーナーのご理解を得て、まずはいつもの通りのファドを聴かせてもらおうと思います。この試みが成功したら、もっともっと月田秀子の深淵に立ち入ってみたいと思っています。目標は、2ヶ月に1回ぐらい、この会を催すことができればと思っています。ファド倶楽部の皆様にも、是非ご来場いただき、ご意見を聞かせていただけたらと、この場をお借りしてご案内させていただきます。ご予約をお待ちしています。席に限りがあります。整理の都合上、ご予約はFAXもしくはメールでお願いします。

Fax : 03-5999-9281 (加藤克雄宛)

Fax : 03-3458-9806 (月田秀子ファド倶楽部)

E-mail : info@fado.jp

- 7月7日(木) 河島英五さんの「野風僧」の作曲者として有名な山本寛之さんのコンサートに出演することになりました。ファド一曲と山本寛之さんのオリジナル曲一曲を歌わせていただく予定です。会場は、四谷区民ホールですが、詳細は未定です。入場ご希望者は、二ヶ月前頃にファド倶楽部までお問合わせください。

cartas

- 生涯聴きつづけるであろうCDありがとう。月田さんの声にいつもつきあげられる感情があり、それが確かに、この一日を生きる力となっています。

(京都・S.H)

(20年近く前になるでしょうか？布切れのひとつひとつに一人一人の人生、想いのこめられたキルトに魅せられた青年の記事を読み、お電話でお話したのは。そして、やっとお会いできた。琵琶湖畔「しずか楼」での『鴨鍋とファドの夕べ』。あなたの染めた布を通して照明は、私の歌声まで様々な色で染めてくれました。ありがとう。)

- 今の時代、なにもかもスピード重視。とても息が詰まる思いです。じつくり腰据えてることが、受け入れられないことに得地の知れない危機感を感じてしまいます。残さなければいけないものがあるのに、それを何のためらいもなく切り捨てて、前に進むだけ。ただのファッションです。でもこのことに疲れたとき、きっと人は求める。そして後悔する。何も残さなかったことに。

私の夢は……うまくいえないけど、トルナトーレの映画のように、老人と子供が会話をするんです。「じっちゃん、この人だーれ?」「あっ、これか？私が若い頃聞いていた歌手だ。今のおまえにゃあわからんだろうが、いつかきっとこの人の歌にたどりつく」「なあ、へんな外国語で歌ってるけど、何処の国の言葉なんだ?」「これはな、ポルトガルって国の言葉だ。ヨーロッパの西のちっちゃな国だ。そこのファドって音楽だ。この人はそこで苦勞してファドって音楽聴いて憶えて、日本に伝えた最初の人なんだ」「えっ、外人じゃないの?」「日本人さ。でもそんなことはどうでもいい。ファドはハートだ。それができるただ一人の人だった。日本人でファディスタと呼ぶのは彼女だけだったよ。今はわからなくていい。」「じっちゃん、若い頃ひねくれてたろ。」

「少しな。でもいつかおまえが私の年になればきっとわかるさ。」ってね。私が亡くなったあと、その子がほこりにまみれたCDを見つけて興味を持ち出す。でも、音を出す機械がない。「じっちゃん、あの時聴かせてくれた曲なんだったっけ？名前は……ツキダ？あるかな？あった！でも、どうすりゃいいんだ？」ささやかですけど、こんな風に伝えることができたらいいなあとと思います。でも何もなければ何も伝えられない。今、少しでも残しておかなければ、きっと後悔する。時のかなたに埋没させてしまったら取り返しがつかない。月田さんからいただいたCD、それらは時間がたてばたつほど重みを増す。私のやることは、絶対にこのCDをなくしてはならないこと。後世に伝えることです。今は、一人でもいいから私の次を担ってくれる人が出てくることを望むだけです。「じっちゃん、こんなすごい聴いてたんだ。わかる！わかる！……そうだ、誰かの娘って言ってたっけ？ア？……アマリア？どんな人だったんだろう？」そしてその後、気づくんです。「じっちゃんの言ってた娘ということは、こういうことだったのか」ささやかな夢です。

(青森・K.H)

(こちらこそ、いつも素晴らしい選曲のMDを送ってくださってありがとう。あなたの選ぶ曲は、どれも人間のにおいがします。そして、そんな歌が私は好きです。そんな歌のひとつの中に私のファドを入れてくださったことは私にとって何よりも嬉しいことです。そうやって心熱くして聴いてくださる人がいるということは何よりも私の支えになっています。遠く離れて、なかなかお会いすることもできませんが、距離も時も越えて、人は共感し合えるものだというのを、あなたは教えてくださいました。ありがとう。)



<編集後記>

桜は咲きましたか？春は必ず訪れるけど、関西でのライブに足を運ぶ人はめっきり少なくなりました。「未来への競争をしている内に、現在＝「いま」は見すごされ、自分から遠く離れた「どこか」のために、自分がいる「ここ」は見すごされ、個人は多数派の悪によって凌駕された」「この世にたったひとつのものなど存在しない。あるのはたったひとつの瞬間だけだ。」「『海からの贈りもの』アン・モロウ・リンドバーグ著) 1950年代に書かれた文章が、夜道を照らす月の明かりのようにやさしく今の私を支えてくれる。(月田)

月田秀子ファド倶楽部ホームページ

<http://www.fado.jp/>

- 月田秀子ファド倶楽部ジャーナル 第46号
- 2005年4月1日発行 (季刊：年4回発行)
- 編集・発行「月田秀子ファド倶楽部」事務局
- 〒108-0075 東京都港区港南1-8-27 日新ビル1406号
- TEL&FAX 03-3458-9806

＜月田秀子のスケジュール＞

4月 4日(月)	東京・渋谷「マヌエル」 *要予約 開場：18：00 ライブ：20：30～（約1時間）	予約・問合せ：tel / 03-5738-0125 料金：6,000円（ディナー・ライブチャージ込み）
5日(火)	東京・四谷「マヌエル」 *要予約	予約・問合せ：tel / 03-5276-2432
6日(水)	「NOITE DE SAUDADE Vol.20」 開場：18：00 ステージ：①20：30 ②21：30 ③22：30（各ステージ20分・入替なし）	ライブチャージ：2,500円
11日(月)	岐阜「香港・マカオナイト」岐阜市文化センター	問合せ：JATA2000万人プロジェクト事務局 tel / 03-3592-1274
13日(水)	静岡「香港・マカオナイト」静岡市民文化会館	
15日(金)	長野「香港・マカオナイト」メルパルク長野 開場：18：00 開演：18：30（入場無料） *JATA（日本旅行業協会）企画による海外カルチャーフェスティバルの一環として香港およびマカオ政府観光局主催のイベントです。ステージでは、香港のライオンダンスカンパニー等のパフォーマンスに続いて、ポルトガルの文化、風習の残るマカオの風景をバックにファドを45分ほど歌います。お近くの皆様、是非ご来場ください。	
27日(水)	京都・四条河原町「巴里野郎」 ステージ：①20：00 ②21：00 ③22：00	予約・問合せ：tel / 075-361-3535 チャージ：3,500円（入れ替えなし）
28日(木)	大阪・心斎橋「アートクラブ」 ステージ：20：00から3回（入れ替えなし）	予約・問合せ：tel / 06-6212-2870 チャージ：2,800円
29日(金)	大阪・南方「三裕の館」 ステージ：①20：00 ②21：00	予約・問合せ：tel / 06-6304-1745 料金：5,000円（ワイン・オードブル付）
5月 16日(月)	東京・渋谷「マヌエル」 *要予約 開場：18：00 ライブ：20：30～（約1時間）	予約・問合せ：tel / 03-5738-0125 料金：6,000円（ディナー・ライブチャージ込み）
17日(火)	東京・四谷「マヌエル」 *要予約	予約・問合せ：tel / 03-5276-2432
18日(水)	「NOITE DE SAUDADE Vol.21」 開場：18：00 ステージ：①20：30 ②21：30 ③22：30（各ステージ20分・入替なし）	ライブチャージ：2,500円
19日(木)	東京・目白「三華（MIHANA）」*要予約 開場：18：00 開演：19：30 *ファド倶楽部会員の加藤氏が企画していただきました。レトロでシンプルなお店に月田は二つ返事でGOのサインを出しました。会員の皆様が憩えるような定期ライブももくろんでいます。ぜひ、お気軽にご来場ください。	予約・問合せ：tel / 03-3950-2434 料金：6,000円（ワンドリンク・和風バイキング）
20日(金)	鎌倉・大船「バラッツォ ヴィオラ」 鎌倉市大船1-22-11 開場：18：00 ディナー：18：10～ 開演：19：10 料金：7,500円（ディナー・フリードリンク・税込） *大船駅東口近くの素敵なお店での初めてのライブです。月田のファドにほれ込んでくださったママの高橋さんが企画していただきました。お近くの方はぜひ一度聴きにきてください。	予約・問合せ：tel / fax 0467-44-4005
25日(水)	京都・四条河原町「巴里野郎」 ステージ：①20：00 ②21：00 ③22：00	予約・問合せ：tel / 075-361-3535 チャージ：3,500円（入れ替えなし）
26日(木)	大阪・心斎橋「アートクラブ」 ステージ：20：00から3回（入れ替えなし）	予約・問合せ：tel / 06-6212-2870 チャージ：2,800円
27日(金)	大阪・南方「三裕の館」 ステージ：①20：00 ②21：00	予約・問合せ：tel/06-6304-1745 料金：5,000円（ワイン・オードブル付）
28日(土)	神戸・三宮「あいり」 *要予約 開場：18：00 開演：19：00	予約・問合せ：tel / 078-241-1898 料金：5,000円（料理・ドリンク付）
6月 7日(火)	京都・長岡京「五木寛之百寺巡礼・論楽会」 開場：15：00 会場：京都長岡京記念文化会館 *入場ご希望の方は、お早めにファド倶楽部までご連絡ください。	
13日(月)	東京・渋谷「マヌエル」 *要予約 開場：18：00 ライブ：20：30～（約1時間）	予約・問合せ：tel / 03-5738-0125 料金：6,000円（ディナー・ライブチャージ込み）
14日(火)	東京・四谷「マヌエル」 *要予約	予約・問合せ：tel / 03-5276-2432
15日(水)	「NOITE DE SAUDADE Vol.22」 開場：18：00 ステージ：①20：30 ②21：30 ③22：30（各ステージ20分・入替なし）	ライブチャージ：2,500円
22日(水)	京都・四条河原町「巴里野郎」 ステージ：①20：00 ②21：00 ③22：00	予約・問合せ：tel / 075-361-3535 チャージ：3,500円（入れ替えなし）
23日(木)	大阪・心斎橋「アートクラブ」 ステージ：20：00から3回（入れ替えなし）	予約・問合せ：tel / 06-6212-2870 チャージ：2,800円
24日(金)	大阪・南方「三裕の館」 ステージ：①20：00 ②21：00	予約・問合せ：tel / 06-6304-1745 料金：5,000円（ワイン・オードブル付）

ライブ等に関するお問合せは、月田秀子ファド倶楽部でも承っています。お気軽にご連絡ください。
東京都港区港南1-8-27-1406 Tel. / Fax : 03-3458-9806 E-mail : info@fado.jp ホームページ <http://www.fado.jp>